

パネルディスカッション②

「内視鏡による対策型大腸がん検診を実現するための課題」

座長 松田 一夫（福井県健康管理協会県民健康センター）

野崎 良一（大腸肛門病センター高野病院）

S 状結腸鏡の有効性は既に明らかとなり、全大腸内視鏡検査（TCS）についても国内外でランダム化比較試験が進行中である。米国では10年に1回のTCSの受診率が60%を超えていることから、大腸がん年齢調整死亡率は著明に減少している。日本の年齢調整死亡率も減少に転じたものの米国よりは高く、便潜血検査に加えて内視鏡検査による対策型検診が求められる。ただし導入にあたっては、精度管理や偶発症対策、検査間隔や費用対効果の検討、処理能力の確保、小ポリープの取り扱い、データベース構築など様々な課題が存在する。これらの課題について広く議論したい。多くの施設から応募を期待する。